

ラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナをめぐる毀誉褒貶について

平田 渡

孤立した作風、ラモンと開高健を結ぶもの

人物批評については、毀誉褒貶、相半ばするのが理想と言われるが、スペインにおけるラモンに対する評価は、そうした理想からほど遠いところにあった。メキシコの詩人で文明批評家のオクタビオ・パス Octavio Paz（一九一四 メキシコシティー～九八 同地）の言葉を借りれば、実情はほとんど黙殺というのに近かったのである。よほどひいき目に見ても、天国と地獄のあいだに横たわる煉獄をたゆたっている状況にあるとしか言いようがなかった。それほど評価は定まっておらず、批評家からも研究者からも冷やかな目を向けられていた。彼を擁護しようとする作家や詩人の数も、市民戦争が勃発しアルゼンチンに亡命したあと、とくに一時帰国をはたしたあとは、少なかったのである。せいぜい、アソリン（小説家）、オルテガ・イ・ガセー（哲学者）、ルイス・セルヌーダ（詩人）、カミーロ・ホセ・セーラ（小説家）ぐらいしかいない淋しさだったのだ。

そうしたお寒い状況に甘んじなければならなかった点では、わが国の作家、開高健（一九三〇～八九）の場合と符節を合するように思われる。二十歳のときから彼と親交があり、その人と作品に精通した評論家、谷沢永一氏は、そのわけを次のように解明している。

「世にはどうにも分類できない屹立した個性、そのお仲間を見出すことのほとんどできない孤立した作風が尠なくないのに気付かざるをえない（中略）。近年では開高健が如何なる流派にも属さない孤絶した存在であったのではなからう

か。どのように探しても、方向ならびに方法を同じうした、(中略) 多少は類似した作家さえ見当たらないのである。開高健は誰にも似ていなかったし、誰もまた開高健に似ていなかった。

開高健の文体は、同時代の作家たちと較べてあまりにも異質であったし、また常に鮮烈な効果を発揮し続けていた。謂わゆる文学史家の分類法整理法の手には負えないのである。それゆえ、戦後六十年間に旺盛な作家活動を示した作家のうち、彼ほど論じられることの少ない作家は他に見当たらないのである。評論家からも研究者からも一貫して敬遠されてきたと申しても過言ではなからう。そのような状況のなかでほとんど唯一の例外は、開高文学の独自性を明確に検証した山崎正和の「不機嫌な陶酔」(『曖昧への冒険』収録) 一篇ではなからうか。¹⁾

文学史的に言えば、開高健は「戦後派」に、ラモンは「前衛派」に属しているにもかかわらず、それぞれ周囲を見渡すと仲間がほとんど誰もいないという奇妙な風景が広がっている。それは、開高健の場合、ほかの作家の追隨を許さない、独特の文体と方法論に起因していることは、谷沢永一氏が指摘しているとおりである。

一方、ラモンの場合も、比類のない文体と方法論にもとづいた作風を備えている点で、軌を一にしている。それどころか、文学史家の言う「前衛派」という呼称ではくくれないので、ラモン主義 *ramonismo* という、ラモン一人にしか適用できない呼称が流布することになった。加えて、つとにオクタビオ・パスも述べたように、ラモンは詩、小説、演劇、エッセイ、批評といった文学のジャンルの垣根を破壊したのである。以下に、オクタビオ・パスの言葉を引いてみよう。

「もうひとつの現代精神モデルニダの特徴は、ジャンルのあいだの垣根をとり払おうとする傾向が見られる点である。ジョイスの作品は小説だろうか、詩だろうか。パリエ・インクランは詩と演劇と小説の境界線をこわした。ゴメス・デ・ラ・セルナは、この特徴の極北に位置している。かれの作品はあらゆる様式に変わりうる、

1) 谷沢永一『開高健の名言』東京 KK ロングセラーズ 平21・5・20 2頁。

柔軟性をそなえた巨大なかたまりなのである。(中略) ラモンの天才は絵画の世界のピカソを彷彿させると言っている²⁾

二十世紀の文学世界の金字塔『ユリシーズ』を書いたジェイムズ・ジョイスについては改めて述べるまでもないが、ラモン・マリア・デル・バリエ・イン克蘭 Ramón María del Valle-Inclán (一八六六 ビリャヌエバ・デ・アローサ ～ 一九三六 サンティアゴ・デ・コンポステーラ) の場合は少し説明を要するだろう。フランスの世紀末的な頹廢派と近代派の傾向を併せもった作家として出発したかれは、のちに現実を批判的な視点に立って戯画化する、エスペルペント esperpento(不条理)という独自の手法を編み出した。初期の代表作に、ブラドミン侯爵という新たなドン・ファン像を造型した四部作『四季のソナタ』、晩年の傑作にエスペルペントの方法による演劇『ボヘミアの光』『神々しい言葉』がある。

話を元に戻せば、オクタビオ・パスも言うように、ラモンの作品は「あらゆる様式に変わりうる、柔軟性をそなえた巨大なかたまり」にほかならず、まさに、文学史家や評論家、それに研究者泣かせであることはまちがいない。「評論家からも研究者からも一貫して敬遠されてきた」のも、むべなるかなである。言い換えれば、オクタビオ・パスや、もう少し先で取り上げる哲学者オルテガのような慧眼の士でなければ、ラモンの真価が見抜けなかったのかもしれない。スペインやラテンアメリカ諸国で、ラモンが永らく等閑視されてきた真の原因は、何よりも「如何なる流派にも属さない孤絶した存在であった」からと考えられる。

◆ラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナ Ramón Gómez de la Serna 略歴

一八八八 マドリード ～ 一九六三 ブエノス・アイレス。スペイン前衛派の作家、詩人。マドリード大学からオビエド大学に転籍して法学部を卒業。パリで就職を希望したが、叶わなかった。その代わり父親は、息子のために“社会と文学の雑誌「プロメテウス」*”を創刊し、自ら編集長となる。一九〇九年(二十一歳)

2) Paz, Octavio—*Obras completas 3 Fundación y desidencia DOMINIO HISPANICO*, Circulo de Lectores, Barcelona, 1991, pág. 286.

から一一年にかけて、父親が薄給ながら仕事を見つけてくれたので、憧れのパリ暮らしを愉しむ。一二年（二十四歳）に帰国すると、マドリードの中心地プエルタ・デ・ソル広場近くに、有名な文学サロンを開くことになるカフェ・ボンボ**を見つける。一七年（二十九歳）に青春の掉尾を飾るかたちで、長篇小説『黒衣と白い肌の未亡人』、上品なエロティシズムとユーモアをたたえた小咄集『乳房』、ラモン独自の短詩型の散文作品集『グレグリーア』、華やいだ祝祭的な世界を描いた『サーカス』を出した。長篇小説以外は、いずれも代表作に挙げられる傑作ぞろい。三六年（四十三歳）、徴兵を逃れるようにアルゼンチンに亡命。四九年、一時帰国。南米のパリと言われるブエノス・アイレスで没す。

* “社会と文学の雑誌「プロメテウス」”：Prometeo. 一九〇八年から四年のあいだに、合計三十八号が出た。ラモン作の前衛劇、ゲールモン、ワイルド、ダヌンツィオ、メーテルランク、ローダンバックといった世紀末のパリで活躍した文士たちの作品の翻訳、マリネッティ書き下ろしの「スペイン人に向けた未来主義宣言」が掲載されている。二三年にオルテガが創刊し、現在も存続する「西欧評論」Revista de Occidenteの先駆的な役割を果たす。

** カフェ・ボンボ：正式には antiguo café y botillería de Pombo という。一九一二年から、ラモンがアルゼンチンに亡命する三六年まで、毎週土曜日の夜に、内外の多彩な作家や詩人、思想家、画家、音楽家を招いて開かれた、ラモン主宰の文芸サロン名。ファン・ラモン・ヒメネス〔スペインの詩人〕、エウヘニオ・ドールス〔スペインの美術評論家〕、パブロ・ネルーダ〔チリの詩人〕、トリスタン・ツァラ〔ルーマニア系フランス人の詩人〕、ヴァレリー・ラルボー〔フランス人の作家〕、イリヤ・エレンブルグ〔ユダヤ系ロシア人の作家〕、ホセ・オルテガ・イ・ガセー〔スペインの哲学者〕；パブロ・ピカソ〔スペインの画家〕、ジョアン・ミロ〔同〕、ディエゴ・リベラ〔メキシコの画家〕、ノラ・ボルヘス〔アルゼンチンの閨秀画家〕、マリー・ローランサン〔フランスの閨秀画家〕と

いった著名人が、ラモンの人間的な魅力に惹かれ集まった。第一次世界大戦とスペイン市民戦争に挟まれた二十有余年、マドリードではオアシスにのような平穏な日々が続いた。その間、カフェ・ボンボを中心にさまざまな文学サロンが開かれ、まるでマドリード版のベル・エポックが到来したかのような観を呈していた。

詩人ラファエル・アルベルティのコラージュ

顔見知りの後輩ながら、鷹揚さと厳格さを併せもったアンビヴァレントな態度でラモンを評したのは、共産党員で内乱後アルゼンチンに亡命したラファエル・アルベルティという詩人である。次に、この詩人がラモンをテーマに書いた興味深いコラージュ（もともとはシュルレアリスム美術の一手法。油絵やデッサンに、切り抜いた新聞・広告・写真などを貼りつけ、筆を加えて画面を構成する）風のソネットを引く。そこには、ラモンに対する好悪相半ばする、是是非非の気持ちがよく表われている。

なぜフランコ支持派なのか 君は ドジな ラモン

象に^{またが}跨った ラモン 顔にドーランをつけた ^{ビエロ}道化師

ラモン 靴を履きつぶす行動派 辛抱強さは筋金入り 燕さながらの渡り鳥

かんかん照りの マドリード ^{ピンパンポンならぬピンパンボン}人形倒しまがいの遊びに興ずるボンボでの日日

ラモン 乳房を描き ラモン 山高帽をかぶる

回転木馬を愉しむ ラモン パイプを吹かす ナンセンス

饒舌家で バタ屋然とした振る舞い ^{ゆぼり}立ち尿する街角

ラモンとともに ラモンの中に ラモンの ラモンによって ラモン抜きで
ラモンの後ろに ラモンについて

ラモン ブランコに乗り ゆらゆらゆらの振り子運動

テン・コン・テンならぬテン・シン・テン
阿呆で 間抜けで 不用心

ソロのトロンボーン弾き ラモン オーケストラを奏でる

ラモン 舵を取り 高い所から物を言い マリオネットを操る
ちぐはぐで 嘘みみたいだ けれども

ラモン 天才 ラモン 二人といない ラモン³⁾

「なぜフランコ支持派なのか 君は ドジな ラモン」、「阿呆で 間抜けで 不用心」と揶揄されているのは、以下に述べるような事件が起きたせいである。

ラモンは、スペイン内乱が勃発すると、徴兵を忌避するかたちで、曾遊の地ブエノス・アイレスに亡命する。そして、一九六三年に逝去するまで、恋女房のユダヤ系アルゼンチン人、ルイサ・ソフォヴィッチ Luisa Sofovich といっしょに暮らした。その間、一度だけ祖国の土を踏んでいる。それは四九年のことだった。懐かしいスペインに舞い戻り、感慨も^{ひとしお}一人だったのは分かるとしても、このとき、フランコ支持派の知識人が催した歓迎会にのこのこ出かけたのが、命とりとなったのである。まさしく「ドジ」で「阿呆で 間抜けで 不用心」な行動だったと言わなければならない。

内乱後、いや、内乱の最中から、共和派支持の空気が国内のみならず全世界に広がった。亡命前、マドリードの中心にあるプエルタ・デル・ソル広場近くのカフェ・ポンボで、毎週土曜日の夜に、内外の作家や詩人、画家、音楽家を集めて文芸サロンを主宰し、オルテガ・イ・ガセー主幹の文芸誌「西欧評論」や新聞に健筆をふるって、時代の寵児的な存在だったラモンは、祖国を離れたあと、共和派支持が大勢を占める同業者や評論家、それに知識人から、一転して容赦ない批判を浴びせられたり、それよりも身に堪える黙殺の憂き目にあったりしたのであ

3) Mainer, José-Carlos—Introducción—Ramón Gómez de la Serna, explorador de hemisferios : una lectura de *Senos* (1917) en Gómez de la Serna, Ramón : *Senos*, Madrid, Editorial Biblioteca Nueva, 2005, pág. 16.

る。とくにスペインにおいて顕著だった。

スペインやラテンアメリカ諸国で、ラモンの評価が永いあいだなおざりにされてきた原因は、前衛派と言われながらも、そのじつ「如何なる流派にも属さない孤絶した存在であった」からだ、と前章で述べたが、直接的には、ラファエル・アルベルティの言う「ドジ」で「阿呆で 間抜けで 不用心」な行動が災いしたのである。そのとき、かけられたフランコ支持派だという嫌疑は容易には消えず、現在まで尾を引くことになった。

国会議員だった父親ハビエルが、共和派側のホセ・カナレーハス首相を支える側近の地位まで上り詰めたのはいいが、日頃、苦勞している姿を目にしたせいか、息子ラモンは政治嫌いに通っていた。政治は作家を墮落させると考えていたのである。そして、政治思想については、旗幟^{きし}を鮮明にしない、ノンシャランな態度をとっているうちに体制派^{コンフォルミスト}と見なされるようになったと思われる。

◆ラファエル・アルベルティ Rafael Alberti 略歴

一九〇二 プェルト・デ・サンタマリーア ～ 九九 同地。スペインの詩人。《二七年の世代》*の代表的存在。三一年以降共産黨員。市民戦争後、アルゼンチンに亡命。六三年からローマで暮らす。七七年帰国。八三年セルバンテス賞受賞。代表作に詩集『陸に上がった船乗り』（二五）、『天使たちについて』（二九）、回想録『失われた木立』（全二巻、四二、八七）など。

* 《二七年の世代》：二七年は、スペインのバロック詩人ルイス・デ・ゴンゴラ（一五六一 コルドバ ～ 一六二七 同地）の没後三〇〇年を記念する年、一九二七年にちなむ。ほかに、ガルシア・ロルカ、ペドロ・サリーナス、ピセンテ・アレイクサンドレ、ルイス・セルヌーダといった詩人がいる。ゴンゴラ再評価を図るとともに、スペイン詩の改革運動を押し進めた。イメージと隠喩を重視し、純粹詩を理想とした。

カンシーノス・アッセンスの辛口とルサンチマン

前衛派の旗手としてラモンと鑄^{しのぎ}を削ることになるラファエル・カンシーノス・アッセンスは、ある文士のパーティーでラモンと知り合ったときの印象をつぎのように回想している。

かれは「ずんぐりむっくりの青年、頭でっかちで、ロマン主義時代にジャーナリストとして活躍したラーラふうの揉みあげをし、ものを見るときはカメラのような小さな目を凝らす一方、伊達もいいところだけれど、彫像が堅琴を携えているように、火のついていないパイプを手に擱んでいる。ラモンは新しいタイプの文人なのである。進取の気性に富み、何ごとにも積極的にとりくみ、自己宣伝に余念がない。(中略)古いものすべてを打ち壊そうとしている革命家にほかならない。すでに一冊の本を出し、バローハやアソリンといった作家、それにウナムーノのような哲学者をこてんぱんにやっつけている。このたび、『プロメテウス』という雑誌と二つ折り判の大きな本を刊行したのはいいけれど、読もうとする者は誰もいない」⁴⁾

このカンシーノスの言葉を引用している、サラゴサ大学教授で現在、刊行中のラモン全集の解説者でもある、ホセ・カルロス・マイネールによれば、ラモンに対する「痛烈な皮肉の裏にうらみつらみが見え隠れしている」⁵⁾のだが、ラモンの風貌と姿勢をきっちりと捉えている点はさすがである。

考えてみれば、カンシーノスは、ボルヘスの妹ノラと結婚した批評家ギリエルモ・デ・トーレ Guillermo de Torre (一九〇〇 マドリード～七二 ブエノス・アイレス)とともに、一九一九年にスペイン前衛派運動の嚆矢となる超絶主義 *ultraismo* 運動を起こし、詩的表現の改革をめざした理論家であるばかりではなく、すぐれた批評家でもあったから、それも当然かもしれない。

けれども、うらみつらみ^{ルサンチマン}というか、ラモンに対する嫉妬^{ほむら}の炎を抑えることはで

4) 5) Ibid. — *Ramón en «Prometeo» en Obras Completas I «Prometeo» I Escritos de juventud (1905-1913)*, Círculo de Lectores / Galaxia Gutenberg, Barcelona, 1996, págs.106-107.

きなかった。結局、ふたりの仲は、カンシーノスがラモン主催の文芸サロン“ポンボ”を離脱したときに決裂したけれど、よきライヴァルであったことには変わりがない。したがって、ラモンの人と作品についてのカンシーノスの評価には見るべきものがある。その逆もまた然りである。その意味では、ラモンしか書けない、比類のない、伝記もの『新同時代人の肖像』*Nuevos retratos contemporáneos*⁶⁾ (一九四五)に収められたカンシーノスの風貌と姿勢は、見逃がすわけにはいかない。

そこには、年長のカンシーノスの挑発をうけて、丁丁発止と渡りあう凜々しいラモンの姿が見られる。たとえば、カンシーノスは、次のような文面の手紙をラモンに送りつける。文芸サロン“ポンボ”は、開設以来、すでに三度目の聖体拝領をうけました。その間、あなたを慕う人も、あとに続く人も、たくさんできましたから、そろそろポンボの会を離れ、新しい組織を作られてはどうでしょうか、いつまで“地下聖堂” *sagrada cripta*にとどまっているつもりですか、というのである。それに対して、ラモンは、会員すべての独自性を育て、ポンボを神聖な場所にする決心なので、そんな必要はない、とにべもなかった。

そのあと、カンシーノスの詩人としての資質をこきおろしながら、超絶主義は、フランスで起きている運動のまねごとにすぎない、と手厳しい批判を浴びせている。

◆ラファエル・カンシーノス・アッセンス Rafael Cansinos Assens 略歴

一八八三 セビーリャ ～ 一九六四 マドリード。若き日のホルヘ・ルイス・ボルヘスが師と仰いだスペインの作家、詩人、批評家。スペイン語圏の前衛主義運動の先陣を切った^{ウルトライスマ}超絶主義運動を首唱した。ラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナが主宰していた文学サロン《ポンボ》に出入りしていたが、やがて袂を分かった。代表作に長篇小説『花咲く地にて』(二一)など。

6) Cf. Gómez de la Serna, Ramón—*Nuevos retratos contemporáneos*, Editorial Sudamericana, Buenos Aires, 1945, págs. 301-310.

リアリズムを突きつめ、リアリズムを乗り越えた恰好の例—オルテガのラモン評—

ラモンはグレゲリーアをはじめとする、エッセイ、小説、演劇、伝記といったさまざまな文学の分野で、ゆるぎない革新的精神をもってスペイン前衛派の先頭を走りつづけた詩人・作家である。ギリエルモ・デ・トーレヤカンシーノス・アッセンスらが唱え、ヨーロッパで青春時代ををすごしたボルヘスがかかわり、スペイン・中南米での前衛詩誕生のさきがけとなった超絶主義運動や、アルベルテイ、ガルシア・ロルカ、アレイクサンドレのような名だたる詩人たちを輩出した、《二七年の世代》に大きな影響を及ぼしたことはよく知られている。

話は前後するが、ニカラグア生まれの詩人ルベン・ダリーオ Rubén Darío (一八六七 メタパ ～ 一九一六 レオン) が、一八八〇年代から一九一〇年代半ばにかけてフランスの高踏派や象徴派の詩に範を仰ぎながら、ラテンアメリカにおいて近代派(モデルニスモ) modernismo と呼ばれている詩の革新運動を展開したが、この近代派の運動がそのまま中南米やスペインの現代詩につながったわけではなかった。いままで文学史において見落とされがちだったけれど、近代派から現代詩への橋渡しの役目を担った詩人たちが存在した。その中でとりわけ重要な位置を占めているのが純粹詩をめざした、ノーベル文学賞詩人のファン・ラモン・ヒメネス (一八八一 モゲール ～ 一九五八 サン・ファン・デ・プエルト・リコ) とゴメス・デ・ラ・セルナなのである。

さて、オルテガは、前衛という言葉をいっさい使わず、二十世紀初葉のヨーロッパに澎湃として起こった新しい文学や美術を論じた『芸術の非人間化』(一九二五)の中で、「リアリズムをぎりぎりまで突きつめ、リアリズムを乗り越えた恰好の例といえば、いずれも拡大鏡を通して日常の瑣末なものを眺めたものだが、プルースト、ゴメス・デ・ラ・セルナ、さらにはジョイスがそうである」⁷⁾と述べている。ここでは、ラモンが、二十世紀の世界文学を代表する名作『失われた時を求めて』と『ユリシーズ』をそれぞれ物したマルセル・プルーストとジ

7) ホセ・オルテガ・イ・ガセー『芸術の非人間化』神吉敬三訳 東京 白水社 一九七〇・四・二七 『オルテガ著作集 3』所収 * 71頁を参照させていただいた。

エイムズ・ジョイスと肩を並べているのである。オルテガは、ラモンと旧知の間柄だったとはいえ、単なる仲間褒めのためにこのような言葉を弄する人間ではないから、当時まだ三十六歳でしかなかったラモンは、天にも昇るような思いがしたに違いない。

◆ホセ・オルテガ・イ・ガセー José Ortega y Gasset 略歴

一八八三 マドリード ～ 一九五五 同地。スペインの哲学者。マドリード大学、ライプチヒ大学、ベルリン大学、マールブルグ大学で形而上学教授を歴任。新カント派の哲学者として出発したが、のちにドイツ現象学の影響を受けた。新しいヨーロッパの思想と文学の専門誌「西欧評論」を主宰し、スペイン語圏の国に知的刺戟を与え続けた。三六年、市民戦争を契機に一時アルゼンチンに亡命。四五年に帰国。代表作に『ドン・キホーテをめぐる省察』（一四）『芸術の非人間化』（二五）、『大衆の叛逆』（三〇）など。

ラモンを正当に位置づけるオクタビオ・パスの鶴の一声

スペイン市民戦争（一九三六～三九）の際、ヘミングウェイ、ジョージ・オーウェル、アンドレ・マルローは人民戦線側の国際義勇軍に身を投じて戦い、ガルシア・ロルカはファシスト側に虐殺され、オルテガ、作曲家マヌエル・デ・ファリャ、それにアントニオ・マチャード、ペドロ・サリーナス、ラファエル・アルベルティといった詩人たちは亡命し、ピカソは『ゲルニカ』を描いて戦争の惨禍を告発した。そうした著名な芸術家たちの行動をうけて、戦後から現在にいたるまで、作家や詩人のみならず芸術家一般、さらには学者や知識人までもが、政治的に共和派かそのシンパでないかと評価されない暗黙の空気が世界中を蔽ってしまった感がある。

ラモンはその影響をもろにかぶったように思われてならない。出典はさだかではないが、レーニンのものと思われる言葉を引いて、ガルシア・マルケスが自伝小説『物語るために生きて』 *Vivir para contarla* の中で書いているとおりの事態

が起きたのである。「きみが政治に口を出さなければ、きっと最後には政治のほ
うがきみに口を出すようになるだろうね」⁸⁾

そうした嘆かわしい事態を憂慮したメキシコの詩人オクタビオ・パスは、つぎ
のような論陣を張ってラモンを弁護している。

「私にとってラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナは偉大な作家である。(中略)
現代精神モデルニダというものがかれの口を通して語られた時期がある以上、賞讃をあげせ
られるのはしごく当たり前の話である。作品はまったく斬新だったし、それは現
在も変わっていない。数日前、いわゆるポップ・アートなるものを目にしたとき、
ふとラモンのことが脳裏をかすめた。かれの本はとにかく生きがいうえに懐が
深いので、読んでいると死さえもが健やかなものに思えてくるのだ。このままゴ
メス・デ・ラ・セルナの作品を忘れ去っていいものだろうか。ばかげた黙殺をつ
づけているスペイン人とイスパノアメリカ(スペイン系アメリカ)人を許してい
いものだろうか。スペインとイスパノアメリカの現代詩は、ラモン・ゴメス・デ
・ラ・セルナ、それにウイドブロ〔訳註 一八九三 サンティアゴ～一九四八 カルタヘナ(チ
リ)。チリの前衛詩人。創造主義の提唱者〕、タブラーダ〔同 一八七七 メキシコシティー
～一九四五 ニューヨーク。メキシコの詩人、作家。イスパノアメリカへ俳句を紹介した。ス
ペイン語圏の前衛運動の端緒になった超絶主義の先駆者〕、マセドニオ・フェルナンデス
〔同 一八七四 ブエノス・アイレス～一九五二 同地。アルゼンチンの詩人、作家。知的なユー
モアたたえた、形而上学的な傾向をもった、前衛的な作風が特徴〕といった数人の詩人た
ちが生みだしたものである。現代詩は、散文、それにフランス語や日本語で
書かれ、散文性とコスモポリタンのものを兼ねそなえた異端として生まれた」⁹⁾

一九八九年以来、バルセロナのガラクシア・グーテンベルグ社とシルクロ・
デ・レクターレス社共同出版による本格的な『ラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナ

8) García Márquez, Gabriel—*Vivir para contarla*, Grupo Editorial Random House Mondadori, Barcelona, 2002, pág. 248.

9) Paz, Octavio—*Obras Completas 3 Fundación y desidencia DOMINIO HISPANICO*, Círculo de Lectores, Barcelona, 1991, pág. 286.

全集』(全21巻 二〇〇九年十二月現在、うち3巻未刊)が刊行中だが、それを契機に、ラモン再評価の機運が少しは高まってきているように思われるのは喜ばしいかぎりである。YOU TUBE の動画で、講演をするラモンの様子が見られるご時世なのだから、スペインやイスパノアメリカだけでなくわが国においても正当な評価がおこなわれることを願わずにはいられない。

◆オクタビオ・パス Octavio Paz 略歴

一九一四 メキシコ・シティー ～ 九八 同地。メキシコの詩人、文明批評家、外交官。メキシコ・オリンピックが開催される直前に、首都のトラテロルコ広場で起きた学生虐殺事件に抗議して外交官を辞す。八一年セルバンテス賞、九〇年ノーベル文学賞受賞。代表作に評論『孤独の迷宮』(五〇)、詩論『弓と豎琴』(五六)、詩集『言葉のかげの自由』(六〇)、若い頃にパリとメキシコで影響を受けたシュルレアリスム体験が生きている詩集『鷺か太陽か』(五一)、同『火蜥蜴』(六二)、大使として過ごしたインド体験と新妻への愛を歌った『東斜面』(六九)など。芭蕉『奥の細道』(林屋永吉と共訳、五七)のスペイン語訳も試みている。

ラモンの作品を読むためにスペイン語を学んだヴァレリー・ラルボー

フランス人の作家で、英西伊葡の諸語をよくする非凡な翻訳家だったヴァレリー・ラルボーは、南米の裕福な家庭の子弟が留学する、パリ郊外にあるコレージュ・サント＝バルブ＝デ＝シャンで過ごした三年間に、初めてスペイン語に接して興味を覚えたようである。学校や寄宿舎でスペイン語が第二の言語として日常的に話されていたのだという。長ずるに及んで、クリスマス休暇をマドリッドで楽しんだり、第一次世界大戦が勃発すると、スペインの地中海に面したリゾート地アリカンテで亡命生活を送ったりした。

スペインのビルバオ生まれの作家で評論家だったジャン・カソー Jean Cassou (一八九七 ～ 一九八六) とともに、ヴァレリー・ラルボーはスペイン文学のフランスへの紹介者として知られる。ラモンの作品を読みたいばかりにスペイン語を学

んだと言われる〔訳註 ヴァレリー・ラルポー『幼なごころ』岩崎力訳 東京 岩波文庫 2005・4・15 所収の「訳者あとがき」の冒頭には、ラモンの『新しい本』*Libro nuevo*を手にした、嬉しそうなヴァレリー・ラルポーの写真が掲載されている〕が、友人となったあと、ラモンのために「自伝断章」と題するメモ風の文章をスペイン語で書いている。

ヴァレリー・ラルポーに言わせれば、「夜のしらじら明けまでともった、マドリードにあるラモン邸の窓あかりは、ヨーロッパの舳先^{へきき}を照らす光のように輝きを放っていた」¹⁰⁾のである。その光が前衛の光であったことは、改めて指摘するまでもない。

ヴァレリー・ラルポー自身も前衛文学の担い手であった。パリのシェイクスピア・アンド・カンパニー書店の経営者シルヴィア・ビーチと並んで、困窮した生活を続けながら『ユリシーズ』（一九二二）を書いていたジェイムズ・ジョイスにいち早く注目し、物心両面にわたる援助の手をさし伸べた。そればかりか自らも、いわゆる意識の流れを捉えた内的独白によって代表作の一つ『恋人たち、幸せな恋人たち』（一九二一）を書きあげたのである。

◆ヴァレリー・ラルポー Valery Larbaud 略歴

一八八三 ヴィシー ～ 一九五七 同地。フランスの小説家、詩人、翻訳家。国際色豊かな鉱泉保養都市ヴィシーの裕福な家に生まれる。幼い頃からよく旅行をし、長じて英語、スペイン語、イタリア語を自由に操った。ジョイスの『ユリシーズ』の仏訳に携わった。ジャン・カサー、マルセル・オークレールとともに、ラモン作品の仏訳を手がける。代表作にコロンビア人を主人公にした青春小説『フェルミナ・マルケス』（一一）、ペルー生まれの富裕なアマチュアによる架空全集という、人を食った設定の『A. O. バルナブース全集』（一三）、少年少女を主人公にした短篇集『幼ごころ』（一八）など。

10) Torre, Guillermo de—*Medio siglo de literatura* en Gómez de la Serna, Ramón—*Antología cincuenta años de literatura*, Editorial Losada / Espasa-Calpe Argentina / Editorial Poseidón / Emecé Editores / Editorial Sudamericana, Buenos Aires, 1955, pág. 27.

ラモンは文学的な野望をはらんだ冒険をくり広げたと評したボルヘス

ラモンの短詩型の散文作品グレゲリーアは、一九一七年に初めて一冊の本にまとめられて以来、何回も増補を重ねたり、選集や全集が出たり、さまざまな版が流布することになるが、皮切りの『グレゲリーア』をひもとくかぎりでは、やたら長いうえに冗漫さが目立つ。中には半頁にわたるようなものが含まれている。そこで、ラモンに言わせると、「グレゲリーア同士がくっつかないように」、十三回の休憩時間がもうけられており、そのたびに短篇小説が挿入されているのである。その中の「目ざまし時計」*Los despertadores* や「生き抜く女たち」*Las supervivientes* は佳篇と言っていいので、思わぬ拾いものをした気になる。それゆえに、趣向としては上乘にちがいないのだけれど、肝腎のグレゲリーア自体の出来がいまひとつ芳しくない。

ラモンがグレゲリーアを自家薬籠中のものにするまでには、もう少し時間がかかった。のちに「^{メタファー} 隠喩 + ^{ユーモア} 諧謔 = グレゲリーア」という等式をつくりあげ、隠喩の重要性に着目するが、その頃を待たなければならない。それ以降、グレゲリーアは年年、簡潔な、切れ味の鋭いものになり、本来の持ち味である短詩型の散文作品に近づいてゆく。ラモンが意識していた俳諧のように、一行ですむものも現われはじめるのである。

そうしたグレゲリーアを念頭に置きながら、古今東西の文学に通じた形而上学的な作家、ボルヘスは、ラモンについて次のように的を射た立言をしている。

「ラモンと比べられる文学的な野望をはらんだ冒険をさまざまなかたちで提供できたのは、ルネサンスだけである。『セレスティーナ』や、ラプレーとベン・ジョンソンの作品、あるいはロバート・バートンの『憂鬱の解剖』にふんだんに見られる格言やことわざといえども、おそらくラモンの作品ほどは意欲的ではなかったのではないだろうか」¹¹⁾。

11) Borges, Jorge Luis—*Apéndice Algunas opiniones españolas, americanas y extranjeras sobre mí en Gómez de la Serna, Ramón—Automoribundia (1888-1948)*, Editorial Sudamericana, Buenos Aires, 1948, pág. 791.

◆ボルヘス Jorge Luis Borges 略歴

一八九九 ブエノス・アイレス ～ 一九八六 ジュネーヴ。アルゼンチンの短篇小説家、詩人、批評家。二十二歳ごろまでヨーロッパで過ごす。その間に、ドイツの表現主義に興味を惹かれ、スペインの超絶主義運動に参加した。帰国後、ミゲル・カネー市立図書館、国立図書館（館長）に勤めた。ペロン大統領が失脚するとブエノス・アイレス大学で教壇に立ちながら、該博な知識と巧緻をきわめたプロット、特異な連想と豊饒な想像力を駆使した短篇小説やエッセイを書いた。遺伝的な眼疾を抱えていたが、晩年、教え子の日系人マリア・コダマと結婚した。七九年と八四年に来日。五六年国民文学賞、六一年国際出版社賞（サミュエル・ベケットとともに）、七九年セルバンテス賞受賞。代表作に短篇集『伝奇集』（四四）、同『アレフ』（四九）、同『ブローディーの報告書』（七〇）エッセイ集『論議』（三二）、同『続・審問』（五二）、講演集『ボルヘス・オラル』（七九）、同『七夜』（八〇）など。

ルイス・セルヌーダの目に映った前衛派の旗手ラモン

ラモンの影響を受けた詩人たちのグループ《27年の世代》に属するルイス・セルヌーダは、思想的には、寛容かつ自由で、ゆたかな文化と洗練された伝統を愛するスペインを夢見る詩人だった。

セルヌーダによれば、ラモンは、プルーストやT・S・エリオット、ジョイス、リルケ、ジッドといった同時代の錚々たる作家や詩人と肩を並べるようにして、「文学のための新しい形式、近代思想のための有機的な構造を探し求めた」。したがって、「われわれ同世代のもっとも偉大な作家ではないにしても、そうした名だたる作家の仲間入りをしたのである。けれども、ラモンに比肩し得るどんな作家がいま存在するというのだろうか。誰一人としていない、そのことを素直に認める必要がある」¹²⁾（『現代スペイン詩研究』 *Estudios sobre poesía española*

12) Mainer, José-Carlos—Introducción— Ramón Gómez de la Serna, explorador de hemisferios : una lectura de *Senos* (1917) en Gómez de la Serna, Ramón: *Senos*, Madrid, Editorial Biblioteca Nueva, 2005, pág. 17.

contemporanea, 1957 所収)。

◆ルイス・セルヌーダ Luis Cernuda 略歴

一九〇二 セビーリャ ～ 六三 メキシコ・シティー。スペインの詩人。アルベルティやガルシア・ロルカと同様、《二七年の世代》に属する。同じグループの詩人ペドロ・サリーナスがセビーリャ大学教授だった頃の教え子。恩師の勧めもあって、そのひそみにならない、フランスのトゥールーズ大学や英国のグラスゴー大学、ケンブリッジ大学、ロンドン大学、アメリカのマウント・ホールヨーク大学、さらにはメキシコの国立自治大学（UNAM）で文学を講じる。メキシコと出会うことによって、〈南〉を〈楽園〉の^{メタファー}隠喩と見なす神話的思考を深めた。ベッケルやヘルダーリンのようなロマン主義の詩人、シュルレアリスムの影響を受ける。三六年以降、作品は『現実と欲望』という題のもとに集成されていった（六四年最終版）。ほかに散文詩集『オクノス』（四二）、同『メキシコをめぐる変奏曲』（五二）がある。

ラモンを巨匠と仰ぎ見たアルゼンチン人作家のひとりコルタサル

アルゼンチンでボルヘス、オリベリオ・ヒロンド、マセドニオ・フェルナンデス、ビクトリア・オカンポとともに、ラモンを巨匠と認めた作家に、フリオ・コルタサルがいる。

コルタサルは若き日のラモン読書体験をふりかえりつつ、以下のように述べている。

「ぼくはラモンのおかげでさまざまな知識を得たし、心に残る言葉を記憶にとどめたものだった。知識は、かれが書いたオスカー・ワイルド、ボードレール、ジャン・コクトーといった作家や詩人に関する伝記から得たものにほかならない。一方、心に残る言葉はというと、ラモンの文章を読んでいて直に脳裡に刻まれたものである。かれの文体には、口頭で語られたわけでもないのに、読者の耳に快く響くという特色がある。まるで読書とは何よりもまず音声に聴き入ること

であるかのようだ」¹³⁾。

◆ フリオ・コルタサル Julio Cortázar 略歴

一九一四 ブリュッセル ～ 八四 パリ。アルゼンチンの作家。少年の頃からエドガー・アラン・ポーを愛読する。ブエノス・アイレス大学文学部中退。高校教師を勤めたあと、パリに留学。ユネスコで翻訳の仕事をしなが、幻想的な短篇小说をものする。六十年代から八十年代にかけて、アメリカ、キューバ、エクアドル、ペルー、チリ、ニカラグアを旅行し、ラテンアメリカ諸国が抱えている政治的問題に関心を寄せる。日常的な現実の中に非現実的なものが侵入してくる恐怖小説を得意とする。代表作に短篇集『遊戯の終わり』（五六）、同『秘密の武器』（五九）、同『すべての火は火』（六四）、同『愛しのグレンダ』（八〇）、長篇小説『懸賞』（六〇）、手法的に大胆な実験を試みた同『石蹴り遊び』（六四）など。

見ず知らずのラモンに序文を書かせたつわものルイス・カルドーサ

日本ではあまり知られていないグアテマラの詩人、ルイス・カルドーサは、弱冠十九歳で出した、未熟さばかりが目につく処女詩集『ルナ・パーク』（二三）をラモンに献呈したという。すると、すぐに礼状が届いた。それに気をよくしたルイス・カルドーサは、第二詩集『モスケン島の大うず潮*』（二六）を書きあげると、「序文をお願いできたら嬉しく思います。こちらのメガネにかなうものであれば採用致します」¹⁴⁾ というまことに不遜きわまりない内容の手紙をそえて、ラモンのもつに送りつけた。

しかし、敵も然る者である。ラモンは、上質紙に赤インクで書いた原稿をきちんと届けてくれた。ルイス・カルドーサの見立てによれば、案外、詩の出来うんぬんよりも、思い上がった物言いをする若造に好奇心をそそられたのかもしれない

13) Ibid. — Ibid. pág. 18.

14) Cardoza y Aragón, Luis—*EL RIO Novelas de caballería*, Fondo de Cultura Económica, México, 1986, págs. 209.

い。

こうして、『モスケン島の大うず潮*』は、ラモンの序文つきで、哲学者オルテガ・イ・ガセー主宰の文芸・思想誌『西欧評論』に発表され、ベンハミン・ハルネス Benjamin Jarnès [一八八八 コド(サラゴサ)～一九五〇 マドリード] という作家から好意的な評価をえた。そして、ラモンの自筆原稿はといえば、ルイス・カルドーサの実家に家宝として大切に保管されているらしい。

のちに、ルイス・カルドーサは、パリでラモンと会い、親交を深めることになるのだが、ラモンについて以下のように述べている。

「ゴメス・デ・ラ・セルナはあまりにもたくさんの作品を発表しているので、全体の二十分の一ぐらいしか読んでいない。かれは九八年の世代**の作家たちに比肩しうる作家である。教条的なところはないし、創意工夫に富み、自由でのびやかで、ユーモア精神にあふれ、見かけによらず深みもあり、面白いものにしようと釈迦力になっているわけでもないのに、思いもよらぬ展開に満ちみちている。それなのに、スウェーデン人はペレス・ガルドスよりも先にホセ・デ・エチェガライにノーベル文学賞を授けてしまった。かれらはホルヘ・ギリェン、ホセ・ベルガミンの世代と繋がっている。ここでいうかれらとは、ファリヤ、バリエ・インクラン、ガウディ、ミロ、ブニユエル、ダリのことにはかならない。けれども、ラモンはラモンのことしか想起させないのである」¹⁵⁾

ご覧のとおり、同じ段落の中で話題があちこちに飛ぶ、独特のバロック的文体によって書かれ、意表を突かれることが多い。

◆ルイス・カルドーサ・イ・アラゴン Luis Cardoza y Aragón 略歴

一九〇四 アンティグア ～ 九二 メキシコシティー。グアテマラの詩人、作家、批評家。十六歳の頃からニューヨーク、パリを放浪したあと、メキシコシティーに定住した。パリ時代にシュルレアリスムの洗礼を受ける。ラモンに献呈した処

15) Ibid. — *Ibid.* pág. 210.

女詩集『ルナ・パーク』(二三)、ラモンに序文執筆を依頼し、みごと夢を実現させた第二詩集『モスケン島の大うず潮*』(二六)、第三詩集『夢遊病者』(三七)、祖国を憂えて書いた政治評論『グアテマラ、その手相』(五五)、それに“遍歴の騎士の小説”と銘打った、九百頁になんなんとする浩瀚な回想録『河』(八六)などを上梓した。

* モスケン島の大うず潮：Maelstrom. ノルウェイ北西海岸沖合の大うず潮。ジュール・ヴェルヌやE・A・ポーの作品によって誇張され、船や人間を呑みこむとされた。

**九八年の世代：generación del 98. 一八九八年は、スペインが米西戦争に敗れた年。その結果、キューバ、フィリピン、グアムといった最後に残っていた植民地を失った。そうした国家の没落を象徴する年に、母国の再生をめざす運動を展開すべく、立ちあがった作家たちの総称。ミゲル・デ・ウナムーノ〔哲学者〕、命名者のアソリン〔作家〕、ピオ・バローハ〔同〕、ラミーロ・デ・マエストゥ〔同〕が名を連ねている。互いの絆を深めた行事としては、フィガロの筆名で手厳しいスペイン批判をあげせた、ロマン主義時代のジャーナリスト、マリアーノ・ホセ・デ・ラーラにオマージュを捧げたり、スペイン的な内面性を備えていた画家エル・グレコが定住したトレドを訪れたりした。ウナムーノ『生粋主義について』、マエストゥ『もうひとつのスペインをめざして』、バローハ『完徳の道』『知恵の樹』、アソリン『意志』のような作品がこの世代の思想をよく表わしている。思想的な先駆者には、シルベルオ・ランサとアンヘル・ガニバーという作家がいる。バリエ・イン克蘭〔作家〕、アントニオ・マチャード〔詩人〕、ハシント・ベンベンテ〔劇作家〕を含めることもある。

アルゼンチン亡命後のラモンの骨身にこめられたスペイン文壇による黙殺

ブエノス・アイレスといえば、ラモンが講演旅行に出かけたり、文芸誌『スー

ル』創刊のための会議に招かれて執筆陣に加わったり、ユダヤ系アルゼンチン人の恋人、ルイサ・ソフォヴィッチを見初めたりした、懐かしい思い出の都市である。

くり返しになるが、スペイン市民戦争が勃発すると、兵士として駆り出されることを怖れたラモンは、すでにマドリードに呼び寄せて一緒に暮らしていたルイサ・ソフォヴィッチとともに、アルゼンチンに亡命することに決め、時を移さずに実行した。

ブエノス・アイレスでは、イポリット・イリゴージェン街に居を構えた。アルゼンチンの文壇では、欧米の新しい文学の流れを積極的に紹介した、『スール』誌を主宰する閨秀作家ビクトリア・オカンポをはじめ、マセドニオ・フェルナンデス、オリベリオ・ヒロンドといった面々が、ラモンに歓迎の意を表してくれた。したがって、ブエノス・アイレスの住み心地は決して悪くなかったのだが、マドリード大好き人間だったラモンにとっては、やはりスペインが恋しくてならなかったのである。

ところが、すでにラファエル・アルベルティのコラージュの項で書いたとおり、一九四九年に帰国したときに、フランコ派の文人が開いた歓迎会に出かけるという失態を演じてしまった。それ以降、スペインのみならずラテンアメリカ諸国の作家や詩人、批評家から黙殺されるはめに陥った。

その期間はフランコ総統の存命中はもちろん、死後も続いたからずいぶん永かったように思われる。けれども、やがて、オクタビオ・パスのような心ある詩人から、再評価を望む同情をこめた声があがったのは、ラモンの遺した文業からすれば当然のことだと言わなければならない。